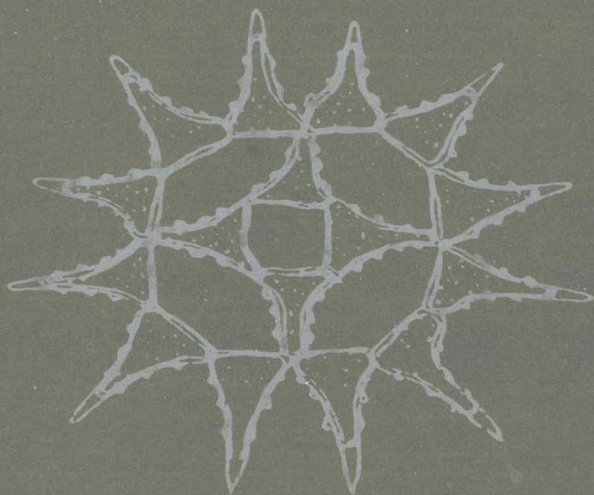
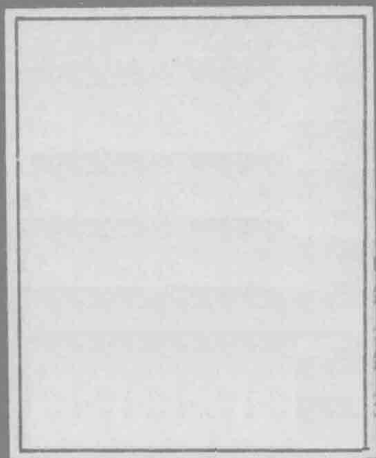


シュロン耕地

|黒糖秘帖|



斎藤芳樹



シロン耕地黒糖秘帖

斎藤芳樹

東都書房

著者紹介 斎藤芳樹

大正5年奄美大島生れ。昭和9年大島中学校卒。17年「大陸文学賞」。24年「夏目漱石賞」受賞。同年「第2回群像賞」佳作入選。主な著書「なぐれむん譚」



シュロン耕地 定価430円

昭和42年1月25日 第1刷発行

© Yosiki Saito 1967

著者 斎藤芳樹
発行者 佐藤鉄男
発行所 東都書房

東京都文京区音羽2丁目12番21号
電話 (942) 1111 振替 (東京) 72732

印刷所 豊国印刷株式会社
製本所 大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえします

第一章

山麓の製糖小屋……………5

ノロクメガナシ……………17

ハブの眼……………33

奇跡の児……………49

第二章

御用糖秘録……………74

暗転……………88

嫁入り行列……………103

満月のまぼろし……………122

第三章

首埋めの歌	229	死神將軍	142
黒い魔風	212	十七人目の男	129
部落談合	195		
黒糖双難	182		
祖父と孫	162		
神の御園	155		

シ
ユ
ロ
ン
耕
地

— 黒糖秘帖 —

装幀 森下 昭

第一章

山麓の製糖小屋

東支那海は、ひねもす油風ぎて、なめらかにうねり映えていた。点在する琉球列島の上を、南から北へ、稻妻をともしなわなない遠雷がしげしげと轟き流れていく。

奄美大島は、黒砂糖づくりの真盛りであった。

天気は、いまにも崩れそうでいて、だが、快晴に持ちなおっている。照りつける陽ざしも、もう初夏のものであった。御用糖横目伊集院伊兵衛が勘算しているヤマト流儀の暦の上では、寛文五年（一六六五）の三月も半ばを過ぎていた。

口増しに待たれるのが、五反帆をはらました搬糖船の、第一陣の訪れであった。それも、そろそろヤマトの国を出立しはじまるであろう、急速な季節の足の早まりようである。

ゆったりとうねる黒潮路の沖合いから眺めると、島の西南端部に、ひとときわ抜きん出たトモンド

嶽が、くろぐろと亜熱帯樹林におおわれていた。傾斜も急に、鬱蒼となだれこむ谷間い深くの、淡い山霧の幽邃なただいに、芒洋のただなかの佗しい孤島の情感がにじんで望まれる。が、それも午まえまでのことであつた。すっかり山霧の霽れあがつたあとの濃緑が、まるで開けっぴろげに明るく、山容までが鋭角型の、熱情的な景観のものとなつた。

やがて、トモンド嶽は、西陽をまともに受ける。

すると、山頂近くのサンチャゴ岩が、勾玉の切り口の緻密な閃きようで、七色の光彩に照り映える。この山の麓に、ヤマトの国のサツマのお上りが召しあがる御用糖づくりの、シタタキヤドリ《製糖小屋》があつた。

じつとりと汗ばむ製糖日和が、いくにちも、いくにちもつづいていた。シュロン耕地の砂糖黍畑は、あらかた刈りひろげられてあつた。耕地の上の大気は、萎びる砂糖黍殻の香りで甘かつた。

——その日。麻武仁爺まぶにじいさんは、洗い張りしたての盲縞の筒袖に着替えて、家を出た。

肩の高さの玉石垣が、すぐに直角に切れて折れまがる。そこから急にひろがる展望の、ひだり道端に、白い浮き雲にふれるばかりの高さの巨大な欖榔樹が五本、まっすぐに整った見事な均等間隔で、一列に立ち並んでいる。この並木の出はずれたところから、部落の入り口のところまで延びきっている白砂地の小道の、ゆるやかな傾斜の起伏の眺めも、清潔であつた。

古い先祖の方々が、どうして、部落から遠くかけ離れたこんな場所に、こじんまりと家屋敷をかまえられたものか……？　　いってみれば、屋敷角に勇ましく胸を張って直立する、この五本の欖榔

樹は、忠実な歴代の屋敷番人の観であろうか。そしてまた、海岸づたいに延びて、やがてナンゴラ川の土橋のたもとに達する小道こそは、部落と孤独なこの一軒屋敷を結ぶ、心の通い路ともいえ

た。
麻武仁爺さんは、いちばん気ごろの通いあっている四番目の檳榔樹の下まできて、ゆっくりと足をとめる。とても両手ではかかえきれまい直幹の梢に仰がれる、広い扇型の葉並びの、かすかなざわめきの歌声で、その日の風向きや天候の加減を見てとるこの慣わしも、もう幾十年のものになるであらう。

性癖や相性が、人間どうしの間に付きものであるのと同じく、檳榔樹にだって、やはりそれはあるのだ。不思議と、隣りあわせのどの樹よりも、微妙に繊細な葉ずれのささやきを持つているのが、四番目だった。きょうみだいに、すがすがしく晴れわたった日の、檳榔樹の梢を透かしての空の眺めは、また格別であった。口にこそ出さないが、胸の中では、自ずと湧きあがってくるさまざまの情感を、問わず語りに、それとなくもてあそんでいるという節もあるにはあっただろう。なにしろ、麻武仁爺さんほどの多忙な役目と仕事を背負っている人なら、朝の出かけ前のほんの一時を、天下を乗っ取ったあんばいの鷹揚な身ぶりで樹上を仰ぎ、不遜なまでに左肩をそびやかせてみたところで、それでどうということもあるまい。

だが、麻武仁爺さんは、両手を脇に当てて仰ぎ見いていたその姿態を、ふいと崩すや、いましがた出てきたばかりの玉石垣沿いに、あたふたと引きかえしていった。

ウユリは、納屋の入り口のところにいた。出産をあすにひかえた身ごもり腹を仰山に、鎌の刃の研ぎ味を指先でしらべていた。

「生き神様のノロクメガナシ様から貰うてきた、ほれ、あのカダホ水……」

訊きとがめる調子の、麻武仁爺さんの強いひびきの口調だった。

「ええかのウ、あのカダホ水には、ありがたい神通力のものがこめられてうじやる。わすれずに仕事場へ持って行って、しっかりと頂きんそうれイ」

ウユリは、ほつれ毛をかきあげた。返答の仕草にしては、なまぬるいものであった。が、大男の倅の阿賀里の嫁女にふさわしい、大柄なウユリの躰つきの、血色のよさが、いかにも頼もしいかぎりであった。

「汝が——」

と、麻武仁爺さんは一段と語氣に力をこめた。

「——汝が、きょうの割り当ての仕事場所は、どこでうじやったかヤ？」

「きょうも……あすも……」と、異妙に口ごもるウユリの口調には、まだ、完全にこの部落の者になりきれないでいる、他所者の味の訛りが消えずに絡まりついていた。

「吾が仕事場ならば、ヒイージャ曲りんところの、砂糖黍畑でありんそうる」

「言うておくが、氣張つてたもれ！ あすちゅう日はのウ、いよいよ儂が一族のもの、一生一代を賭けての勝負みたいなものでうじやるぞ。ええかや、あげな間座金ン家の嫁女に、決して負くる

な！　おーヨ、ガリヤバラ酋長がごとき大人物の初孫を産んでたもれ。なにがなんでも、間座金ン家の嫁女より、片時でも早よう先に、りっぱな男の子を産むことじゃ。氣張つてたもれ！」

強引に促されて、ウユリは領き返してみせた。が、それでも麻武仁爺さんは得意氣だった。にんまりと金壺眼をそばめ、両肩をいからした威勢のよさで、門を出た。

ナンゴラ川の土橋を渡らずに、川岸に沿つてすこしのぼると、二番目の土橋にさしかかる。

ここが、シュロン耕地の入り口であつた。

七分通り刈りとられてあるとはいへ、背丈以上の高さのにびた砂糖黍の群がり、広い耕地に、緑の小島のあるばいの点在を見せている。製糖小屋は、真正面の山麓にあつた。茅葺きの軒下から、煙をあげていた。

麻武仁爺さんの足どりは勇んでいた。眼のとどくかぎりの場所の働き手たちに向つて、氣前のいい朝方の挨拶を投げかける。

「今日ンきや、拝みんそうらん。氣張ち働きみんそうれイ」

すると、あっちこっちで、研ぎ鎌の刃がきらめいて、同じ文句の挨拶の聲が、にぎやかに返されてくる。

——おーヨ、と、麻武仁爺さんの金壺眼は、より一層輝くのだつた。なるほど、昨夜は、この作ようふ用夫の連中と白砂浜で焚火を囲んで、遠慮会釈なく歌い愉しんだ、そういう間柄のものかもしれない。がしかし、この耕地の、このお天道様の輝きの下にあるかぎり、麻武仁爺さんは、れっきとし

た製糖小屋の大親役の座にあった。その役目の本来の意趣そのものは、つまりは、ヤマト役人のお守りにあるともいえるだろう。とはいえ、麻武仁爺さんには、やはりなさねばならない貴重な仕事で、山ほどにひかえているのだ。

まず、製糖小屋に小腰をかがめて飛びこむなり、夜番働きの者たちの報告を、いちいち聞き取り、それから、てきばきとそれを眼でたしかめて観て廻る。軒の低い暗がりの中に、湯気と煙が、さかんに立ちこめていた。砂糖黍汁を湛えた一石樽が、ちょうど膝頭の低さほどに土中に埋まっている。その樽の汁を、素早く指先でなめてみながら、もう躰は、ふつふつと煮えたっている一番鍋と二番鍋の間を、せわしく往ったり、来たりする。その真下あたりを煙突の穴が横に這っていて、足裏のぬくもるあんばいに地肌の焼けた領域のところから、小屋じゅうの全機能の動きを入念にとらえた揚句に、二番竈の、これからの火熱配分の持っていき方が指示される。

「よっしゃ、夢見ごこちのとり火じゃ！」

麻武仁爺さんが、もつともやかましく吟味してかかるのが、仕上り前の二番鍋の火熱加減であった。できあがる黒砂糖の品質の良し悪しは、このときの火熱加減によって決定づけられるのだと、かねがねから口うるさく説き聞かせてきている。一番むずかしい、その火熱づくりのコツを、麻武仁爺さんは、爺さん一流の耳学問でもって、こんなあんばいに説き明かしてきているのだった。

——世の中の道理ちゅうものは、なんでもかんでも、女ちゅうものに当てはめてみるのが早道じゃ。ええかのウ、金色の舞い衣をまとわれた美しい舞い姫様たちが、妙なる楽の音にあわせて、

夢見ごこちのころよきに、焰の長袖をやんわりとひるがえしつつ、火床いっぱいには舞い踊りなされる……。ここんところよ！ここんところの、この呼吸どころちゅうもんが、一番の肝腎のところよ。

夢見ごこちのとろり火となると、薪の質材の選択までが違ってくる。嚙んで含めるような注意事項を一段落させた麻武仁爺さんは、こんどは、小屋隅の生石灰甕の上の横木に掛けてある年貢帳簿を抱えて、いよいよ人別調べに出かけて行く。

作用夫と呼ばれている賦役働きの者たちにとって、最高の権威者であり、絶対の信用をおかれている正直者の年貢帳簿——。それは、頑丈なクバ紐できっちり綴じられてあった。部厚く、細長い、大福帳に似たつくりのものであった。

この年貢帳簿を小脇にかかえ、古色蒼然たる青銅づくりの矢立を腰に差した麻武仁爺さんが、空咳をつくりながら、それぞれの仕事場へ近づいてくると、そこらあたりの働き手たちは朧じゅうの塵をはたき清めながら、恰好の場所に寄り集まってくる。

この場での、麻武仁爺さんの一挙手一投足が、圧巻であった。神妙に鳴りをしずめて待ち受ける一同の者の前に、大親役の座にある麻武仁爺さんが、これ以上とはない威厳の示しように、胸をそらして立ちはだかるのだ。そして、おもむろに年貢帳簿を割ってひろげる手つきも、権威に貫かれたものであった。

「……………」

言葉もなく、ひとり、ひとりの顔のどまんなかへ、堅い木の実をはめこんだような金壺眼が、じりんと突き刺さってくる。瞬きの失せた鷲の目の鋭さの首実験が、ひとわたり済むと、腰の矢立の筆に、おもむろに右手がのびる。木彫りのもののような麻武仁爺さんの硬^{こわ}ばった顔が、いよいよ堅くこわばって、石の堅さのきびしい面持ちのものになるのだった。小筆を、慎重に逆さに持ちかまえないが、改めて、もう一度、鋭く一同の者の顔に金壺眼を当てていく。そして、割ってひろげた帳簿面に、逆さ小筆の筆尻印を、嚴格にひとつひとつと捺しまくっていく手さばきを、吐く息も殺してじっと見いていた一同の者は、帳簿面の最後の捺印が、入念にきっちりとは上りおわった、その途端に、

「トウトガナシ、カンガナシ、玉黄金^{たまぐね}の捻^ねりでありんそうれイ」

と、天地もろもろの神々への豊年万作の祈願を、うやうやしく声をそろえて言上する――。

朝ごとの、この人別調べは、すでに儀式化されてしまっている。なにしろ、四十幾年という長い経歴が、ちゃんと裏打ちされてあるのだ。しかも、この儀式に関するかぎり、麻武仁爺さんの威厳の態度がきびしければ、きびしいほどに、麻武仁爺さんの評判は一段とよくなっていくのだった。

ことに、女や、若い連中にとっては、なおさらであった。この儀式のあいだじゅう、片言の口もきかない麻武仁爺さんの真顔くらい、頼もしく崇高なものは、この世にまたとなかった。働き手たちは、そういう麻武仁爺さんに、きびしくはつきりと首実験をしてもらわないかぎり、ただ働きを

させられているという損な気持ちから、一向に抜けきれないのだ。のみならず、年貢帳簿に筆尻印を捺す際の、麻武仁爺さんの手つきが峻厳をきわめたものであればあるほどに、この世の中までがおごそかな気分をこめて引締まり、より一層、真剣になって働き抜こうという意欲も湧きもしよう。そして、この一年間の年貢仕事を懸命にやりとげ、年貢帳簿に己れの実存の幅をきかせた上での、やがて配分される正統な報酬の稔りに、晴れがましい果報が期待された。

ところで、人別調べの際に、いまだ嘗つて動じたことのない麻武仁爺さんが、きょうばかりは、いささか勝手を狂わしてしまっている。ナンゴラ川端の、万年檜の下に集合した一団の首実験の際であった。相手の間座金は、この中にまぎっていた。けわしく長っ細い間座金の顔の真ん前に突っ立ったとき、さすがの麻武仁爺さんが、隠しおおせようもなしに、心中の乱れを表に現わしていた。

麻武仁爺さんは、もはや六十の坂を遠うに越してしまっている。間座金は、二十そこそこであった。それほどに歳の間へのだたりすぎるこの若造が、まるきり臆面もなしに、真正面から睨みすえてかかってくる。それも、ただの眼の色ではなかった。瞳の小穴のずっと奥深くの個所の、微塵のうろたえもない安全の場にもぐりこんだままで、周到ぶかくこっちの胸の中のを値踏みしかかっている。そういう間座金に面と向かいあって、麻武仁爺さんが鋭く嗅ぎわけていたものは、この井戸端一族の者の体内に受けつがれてきているよこしまな血の匂いであった。先年没したこやつの父親が、やはりこうであった。その祖父にいたっては、なおさらであった。いよいよ棺桶に押

しこんでやる段になっても、恨みがましく剝き出した眼玉を金輪際閉じずじまいで、部落じゅうを慄えあがらせたものであった。そういうあんばいの、曲がりくねった土根性で貫かれた一族のものであった。敵に回すとなれば、なみなみならぬ底意地のものである。ともかく、あすの勝負で、どちらが勝つにしろ、負けるにしろ、その瞬間を境にして、消ゆることのない未来永劫の憎しみが付きまとうてしまうのは、逃がれおせるすべもないことであろう――

結局、さきに視線をそらしてしまったのは、麻武仁爺さんであった。

「トウトウガナシ、カンガナシ、玉黄金たまぐがねの稔りでありんそうれイ」

威勢にまかせて張り叫んだこの集団を締めくくりに、人別調べは完了したのだが、そこから製糖小屋までの麻武仁爺さんの足どりは、まるで戦さ仕度に取って返す者の突進であった。

トモンド嶽から昇天したお天道様が、製糖小屋の横手のガジュマル森の、ちょうどその真上のおたりまで昇りつめられた時刻――。長い赤鞘を野袴にぶっ差した伊集院伊兵衛が、いつもの伝の大仰な乗馬姿で乗りこんでくると、シュロン耕地が、ひっくりがえる騒々しさで一変してしまう。

「働け、働け、働け――ッ、立ち話は御法度じゃ！」

伊集院伊兵衛の、きまり文句がこれであった。叱咤の手綱さばきも狂暴に、耕地一面を滅法無尽に奔走しはじまると、心得た働き手たちの研ぎ鎌の動かしようは、猛烈に回転をはやめた車輪だった。

――それッ、働け、働け、働け――ッ。